

## はじめに

皆さまは、令和の時代を大きな期待を持って迎えられたものと思います。しかしながら、本県の水産業は、秋サケ漁獲量が震災後最低の2.3千トン、種卵確保は2億粒と計画の5割を下回り、採介藻漁業のアワビ、ウニ県漁連共販取扱数量は119トン、88トン(むき身)と、震災前3ヶ年平均の35%、72%、養殖ワカメ、ホタテガイ同取扱数量は13千トン、1.6千トンと、同59%、26%に止まるなど極めて厳しい幕開けとなりました。

資源状態が低位にある秋サケ、サンマ、スルメイカ以外で、漁獲量や共販取扱数量を減少させた主な要因としては、アワビでは一部漁協で漁を中止したこと、ワカメでは海水温の推移や栄養塩の挙動が種苗巻込時期、生長や刈取り時期へ影響を与えたこと、ホタテガイでは麻痺性貝毒による出荷規制期間の長期化等が挙げられます。

加えて、昨年10月19日に襲来した台風第19号が、サケ・マスふ化場や定置網等に甚大な被害を及ぼすなど、水産業の東日本大震災津波や平成28年台風第10号からの復興・復旧に更なる試練を与える年度ともなりました。

このような中、令和元年度は昨年4月9日開講の「いわて水産アカデミー」の研修生に対する講義、秋サケの早期資源回復に向けた稚魚の高温耐性の把握、平成28年度以降続く漁場での海藻不足へ対応するため、ドローン活用による海藻現存量把握手法や大型海藻の半フリー種苗活用による海藻造成手法の検討等に取り組み、着実に成果を収めることができました。

一方で、本年2月16日に職員が起こした交通死亡事故で多くの方々にご迷惑をお掛けし、皆さまの信頼を裏切ってしまったことに改めてお詫びを申し上げます。

さて、当センターは、前身となる岩手県水産試験場が明治43年4月1日に設置されてから本年4月1日で110年を迎えることができました。これも偏に皆さまからお寄せ頂きました数々のご支援と先輩諸氏のこれまでのご尽力の賜物と改めて感謝とお礼を申し上げます。

今後は、資源評価対象魚種の拡大、気候変動といった課題への対応も含め、皆さまの期待に応えられるよう、関係機関等との一層の連携のもと調査や技術開発及び実証研究を強力に進めるとともに、成果の普及等を通じて失った信頼の回復にも努めて参りますので、変わらぬご理解とご支援を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

令和2年10月5日

岩手県水産技術センター所長  
稲荷森 輝明